

魚類の生活色其他に就いて(第5)

黒田長禮

On the life colors of some fishes—V

Nagamichi KURODA

(77) クロアナゴ *Conger conger japonicus* BLEEKER. 1946年1月21日志下瓜島沖手繰網漁獲物中の1点(全長623mm.)を入手する。一体に濃灰褐色(成魚全長600~1000mm.のものは黒褐色が強いらしい)で、幾分紫色を帯び、頭から吻は色少々淡く灰褐色。D.とA.は鉛灰色で相当に高く、縁が黒い。D.の高さは11mm. P.は広く長く(32mm.の長さ)灰色に紫桃色を帯びる。吻側から眼下を経てP.迄の間は淡灰白色、吻側では境が多少鮮明である。下顎及び喉は白色、体側の側線孔(肛門より前方36個)は不判明の擬白色。腹面は擬白色に多少灰色を帯び、下顎端は桃色を呈し、喉も幾分桃色を帯びる。前鼻孔は小管状で突出し擬白色。側線以下の体側は多少灰白色を帯びる。上下両顎は殆ど同長で、D.始部はP.基底より著しく後方に始まるのがこの標品では34.5mm.の距離があり、P.先端は殆どD.始部に達する(以上の関係は個体により多少相異があるらしい)。マアナゴに比せば吻が長い。虹彩汚金色。

方言でヌタハモと云うのが本種らしく、我入道では凡そ1925年位からヌタハモ釣りの専門漁夫があつて我入道と大瀬方面の間、鈴川等で釣り、大は3貫目にも達したというが、昨今は釣れなくなつた。色には黒いのと茶色とがあると云う(故水野誠君調査)。又馬込のクロアナゴ延縄釣り専門の漁夫に尋ねた処、伊豆西浦(大瀬崎より手前湾内)で凡そ80間の深さに延縄を垂れ、イカを餌として釣り、時には友釣もする。方言でハモと云う。私が見したのは2回で1943年10月29日と11月10日とであつた。体色は新鮮のものは黒味が強く、少し褪色のものは灰色を呈していた。皆ウナギの如く開いて日に乾していた。マアナゴより大に長大であつた。方言ヌタハモは漁夫によれば色黒く、且つ大形となり、岩礁ある附近に棲むとのこと。要するにクロアナゴの黒きものがヌタハモに当るらしい。又私は1946年11月15日にはスタウナギ(方言ヌタポー)を釣り、それを頭から丸割ぎしたものをクロアナゴ(方言ハモ)釣の餌にするのを実見した。

又1946年3月19日志下沖手繰で獲られた全長474mm.のクロアナゴではP.は白色で少しく淡バラ色を帯び、虹彩は淡桃銀色を呈した。上顎が下顎より4mm.長く、肛門より前方にある側線孔は37個である。この標品を解剖した処、次の小魚が胃中から発見された。ワニギス稚魚7点(全長35.5~52.5mm.)、ナガオオメハタ稚魚1点(全長40mm.)及びイカ類1点(全長凡78mm.)。

(78) マアナゴ *Conger (Astroconger) myriaster* (BREVOORT). 1945年11月14日千本沖手繰漁獲物中に本種1成魚(全長455mm.)があり入手した。方言でハモ・ホシハモ(我入道)・オオメハモと云う。新鮮色は東京羽田などで見るものに比し遙かに暗色である。これは生活地の相異のためかと思う。即ち背から側面は暗灰褐色[淡灰褐色でない]で、栗羊羹を思い起す。腹は銀白色、頬は無斑で体側にかけて多少黄金光がある。眼の後部と両眼間は擬黒色。P.は淡色で多少桃色を帯び基部は灰色を帯びる。D.とA.後方約 $\frac{2}{3}$ の各縁は黒い。但し鱗そのものは淡灰白色である。C.の端は細くなり少々尖る。側線部の銀白点は擬円形で殆ど側線に沿つて列在する。肛門より前方にある銀白点39個、同上列擬白点16個である。是等の擬白点は一般には眼の後方にあるが、この標品では少なく却つて眼の上前方に密在する。次に面白いことはP.の前方で鰓孔との略々中間に半円形をした小擬白点があることで、これは従来に記載にない様である。虹彩は銀色で僅に上方に桃色を帯びる。

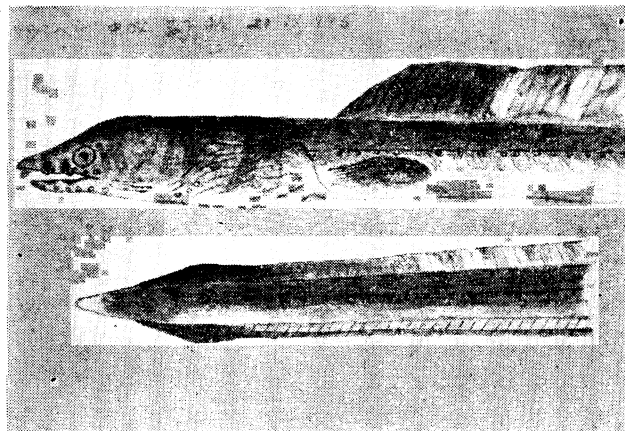
駿河湾にクロアナゴの多いことは確かであるが、マアナゴの方はどの程度か明でないが、我入道での話ではヌタハモ（クロアナゴ）が不漁となつた後にこのホンハモ（マアナゴ）釣が、行われだしたと云つている。

(79) ギンアナゴ *Conger (Rhynchocymba) nystromi nystromi* (JORDAN & SNYDER), 1947年3月6日志下海辺で幼1点を拾得。全長126mm.側線上方の背面は帯灰オリーブ色で、頭の上方は少し桃色を帯び、鰓蓋部は光ある淡黄金色、肛門迄の体側には光りある1線が通り帯蒼緑金色を呈する。肛門以下の光りある線は金色で、C.後方から末端近くは淡桃色を帯び、末端に接して桃色が濃い。P.は黄色、D.とA.とは白色で、外縁は共に細黒縁を有する。虹彩は淡金色、上方が暗色。

(80) ハモ *Muraenesox cinereus* (FORSKÅL), 1947年12月6日江ノ浦沖手繰網の獲物中にハモ（方言でもハモ）の中幼1点を入手した。此地方では余り多くない。全長670mm.,体高(P.部)41.5mm.上顎は下顎より少し長く、その先端は下曲する特徴を有する。背面は淡青銅オリーブ色、頭上から吻上は同色で著しく暗色。頭側から体側は次第に淡色となり、終に銀白色となるが、吻及び頭側には多少の淡黄金色光を帯びる。側線孔は不鮮明でコ字類似形をなして淡色である。D.は鰓孔の上端に始まる。肛門は殆ど全長の中央に開くが尾部の方が頭・胴の和より長く、軀幹よりは著しく長い。D.は帯淡紅灰黄色で軟条は淡紅色、D.の上縁はA.下縁と共に少々細黒縁をなして明瞭である。A.の軟条もD.と同色で、C.端近くに桃色を帯びる。鰓蓋部・喉部及び体前部の腹方等に多少の淡桃色を帯びる。P.は相当に長味があり吻長より長い。この新鮮のものにてP.は誠に美しい葡萄赤色を呈する。〔この色は異例であるか、又は血のにじみ出してのためか目下決定し得ない〕。虹彩は甚だ淡い帯黄銀色。1947年9月13日に桃郷海岸に捨ててあつた尾部も本種のものと思われ、淡蒼銀白色を呈していた。この方が成魚らしく、森下多作によれば最大は1貫目に達すと云う。

1948年11月24日相州大磯で漁獲のアカアマダイの口内から取り出した無足類の1稚魚（全長170mm.）は調査の結果ハモに決定した。これは成魚と全く同一であるが、D.始部は鰓孔直上に始まらないで、4mm.程後方から始まり、丁度P.の中央上から起つていることが異り、又C.先端が著しく細く、細黒縁が多少糸状となる点も異る。D.（尾部を除く）及びA.（尾部を除く）には共に黒縁がない。P.は淡色で細長い（8mm.）。吻及び歯の具合は成魚に等しく、下顎は上顎より明かに短い（1.5mm.短い）。

因に駿河湾・相模湾から私は未だスズハモ (*Muraenesox yamaguchiensis* KATAYAMA & TAKAGI (1954— 山口県下松市魚市場、光市室積町等) に相当する個体を検出し得ない。



第1図 ホタテウミヘビ 志下産、全長605mm. 著者原図

(81) ホタテウミヘビ *Pisoödonophis cancrivorous zophistius* JORDAN & SNYDER. 1946年9月20日志下にて金子栄一拾得。中成魚全長 605 mm. 背面は黒褐色に多少不判明の暗横帯があり、側線より下方は汚白色に幾分淡灰黄色を帯び、尾部下面では暗色を増す。頭側から鰓孔迄の間にも数個の横帯状暗斑がある。鰓孔迄の頭側で眼より後方には小皺が多い。小皺は体の背方から側線下迄にも不判明ながら存在する。眼の前方に2暗斑がある。上下顎 眼の後方及び側線直下には小孔があり、これは尾部の垂直鰭の多少高まる処までの間に小孔1列に並ぶ。P. は真黒色で基部は多少白い。D. は P. 起部上方(中央より前方)に始まり、D. の前方に1大黒褐又は殆ど真黒色の大斑をなす〔本標品では長さ32mm. ある〕。D. の高さ前方で 10mm., 帆立状となる。D. の後方では尾部にあつて高さ 3.5mm., 後端の少し高まつた部は 4mm. 土あり、これは特に上げた高さである。D. の膜は淡灰色の他に所々に灰黒色の雲状斑があり、尾部のD. 膜は灰黒色の暗横帯と淡灰色との交互帯をなし、尾部後端に近づくとも黒色のみとなる。A. はD. より高さ低く、淡灰色を呈し、尾部後方では下縁のみ擬黒色となる。A. の後方の高さ 3mm. A. の後端近き高まりも亦3mm. にすぎない。而して尾端は裸出し(裸出部長さ 10.5 mm.) で擬桃白色である。虹彩は黄色。

(82) スソウミヘビ *Ophichthus urolophus* (T. & S.). 1946年9月10日 志下で釣獲のものを入手した。成魚で全長 570mm., 尾部 330mm. 吻から頭上・頭に黒縁の微小網目斑があり、多くは円形で、尾部に迄密在する。吻と下顎端とは淡オリブ色を帯びる。吻の両側と両眼間には暗色の、前者には1線、後者には大斑をなすが鮮明ではない。眼の後方に暗桃色の不判明の横帯がある。体の背面は一様な淡褐色であることカケヒウミヘビに最も似ている。体の前方は色が稍々濃く、P. 部附近には相当の紫色を加味し、腹部は白地に多少横斑状の灰色斑紋がある。尾部にはこの灰色紋はなく擬白色、尾部の背面は胴部背面に比し遙かに色が淡く、淡帯黄褐色となり、両者の境は稍々明かである。眼の下後部から口角に1淡蒼色の不判明の大斑を示す。眼は小さく虹彩は淡帯黄白色、囲眼部は多少暗色。前鼻孔は淡灰白色。P. は卵形で淡オリブ色に幾分桃色を帯びる。D. は基部濃灰色、上縁は細白線をなして頗る明瞭。尾端は裸出し、擬白色、次に桃紫色の大斑がある。D. の末端近くはA. (擬白色) の末端近くのものと共に著しく昂起する特徴を示す。D. 起部は本標品ではP. 先端(寧ろ中部に近く)の上方から生じていて松原博士(1955)の Fig. 119, F. の図に殆ど一致する。

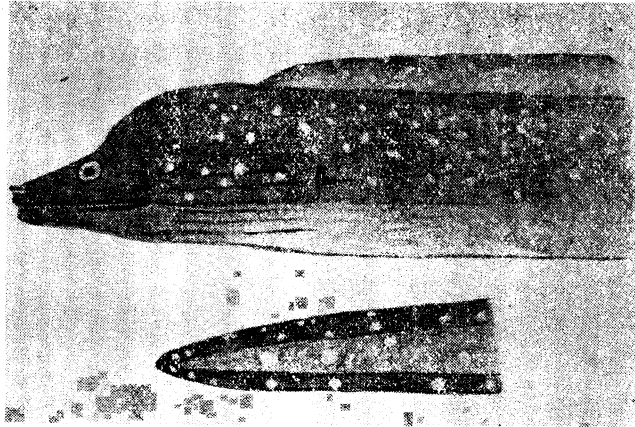
(83) バラウミヘビ *Ophichthus roseus* TANAKA. 1946年7月5日志下海岸で幼1点を拾得。全長 350mm., 尾部 200mm. 背面は一様な汚褐色で、頭は暗色に富み、多少桃色を帯びる。頭側にもバラ色を帯びる。吻と下顎とは暗色、前鼻孔は白管となる。喉以下の腹面は擬白色でそれに少し暗色を帯びる。背腹の境界線は擬白色をなすが鮮明でない。D. はP. の先端上から始まり、A. と共に基だ低く、D. は灰褐色で背面より色暗色で、上縁は細く白い。A. は擬白色で、先 $\frac{1}{2}$ は暗灰色、尾端は裸出し、この附近の鰭は昂起しない。尾端 18mm. の長さはバラ色を帯びる。P. は擬白色、縁に少しく灰色を帯びる。吻端から眼の中央迄に暗褐色の小孔4個、両眼間の少し後方の中央に1孔、眼の後方に4個、下顎に5個、眼の前下方に1個、前鼻孔の基部前後にも各1個・頭側に5個以上の小孔を有する。虹彩は汚金色、瞳子は基だ小さく黒色である。

(84) ダイナンウミヘビ *Ophisurus serpens macrorhynchus* BLEEKER. 嘗て牛臥附近のイワシ延縄で釣獲したことがあつた。生活色は大體、岡田・内田・松原(1935)、日本魚類図説、pl. 34, fig. 3 にて完全であるが、体の金色がもつと著しく光つて美しい。全長1200mm. を越えるところがあるが、私がおのち1947年6月5日志下海岸で拾得した多少乾いたものでは全長がこれに優つていた。測定すると

全長1330mm, 頭 104, 軀幹(鰓孔~肛門迄) 388, 頭胴和、492, 尾部(肛門~尾端) 838.

(85) **トラウツボ** *Muraena pardalis* (T. & S.). 1946年 5月5日志下にて入手。体には約20個の暗褐マルーン色の幅広で不規則形の横帯があり、これ等と交互に帯橙淡褐色の横帯がある。体全体に小白円点と多少長味の擬円点とが散在し、これ等の点は各々黒縁を有するのが特徴。腹面は肛門から前方は主に地色が淡褐色となり、これに大形の白斑があり、時には連続した横帯状長白斑ともなる。頭側には大形擬円白斑がある。

(86) **ユリウツボ** *Gymnothorax leucostigma* JORDAN & RICHARDSON. 1946年2月1日志下海岸で拾得した。全長 580mm., 尾部305mm. 体の地色は淡灰紫色〔岡田・松原 1938, では帯褐



第2図 ユリウツボ 馬込 全長 720mm. 乳白点小形の例

色とある〕で、眼瞼・喉の皺線は黒褐色で頗る顕著。口角に同色の短小線からなる1小斑がある。体の斑は乳白色の擬円斑で、大小あるが、多くは眼径より大きく、軀幹に4—5縦列で、背から腹面に迄ある。頭部のものは可なり淡色となる外、淡蒼色を帯びて小形である。尾部では乳白斑は少くなり、3—4縦列に並ぶ。D. は眼と鰓孔との間の後方ろの部分から始まり〔岡田・松原、1938, では 3とある〕、尾部は頭長と軀幹とを合した長さより頭長の $\frac{1}{2}$ だけ長い。虹彩は橙黄色。

その後私はこのユリウツボを1951年8月8日に沼津市馬込海岸で成1尾を拾得した。全長 720 mm. これでは体の地色は帯灰紫褐色で寧ろ鈍く、白点は真白でなく且つ一体に小形で腹面にも多少分布する。第1回のもより乳白点が遙かに小さく全長は反対に優っている。これは個体変化の成幼の相違からであろう。又私は千本の沼津市営水族館で1952年8月3日に中型2尾を見たが、白斑に個体変化が見られるが共に明瞭に見え、時に擬三角形のもあつた。1953年8月15日にも2尾が収容されていた。又1955年7月29日にも大型1尾があつた。それ故この種はウツボより少いが屢々得られるものと見える。

附記——下に掲げる駿河湾の無足魚類についての生活色の記載又は図はすでに出ている。

ソコアナゴ (*Synaphobranchus (Histiobranchus) bathybius* GÜNTHER) 「動・雑」65(2): 47 (1956)、ゴテンアナゴ (*Conger (Anago) anago* (T. & S.) 岡田・内田・松原、日魚図説 (1935, pl. 35, fig. 1)、ヒレアナゴ (*Echelus uropterus* (T. & S.)) 「魚・雑」2(3): 129 (1952)、クロウミヘビ (*Sphagebranchus kuro* (KURODA) 「生物」Suppl. no. 1, p. 27 (197)、カケヒウミヘビ (*Ophichthus habereri* FRANZ) 「生物」Suppl. no. 1, p. 26 (1947)、イナカウミヘビ (*O. asakusae* JORDAN & SNYDER) 「生物」Suppl. no. 1, p. 26 (1947)、オキノシマウツボ (*Gymnothorax richardsoni* (BLEEKER) =? *G. berndti* SNYDER) 「魚・雑」3(3~5): 154 (1954)、ウツボ (*G. kidako* (T. & S.) 岡田・内田・松原、日魚図説 (1935, pl. 34, fig. 2)、ウナギ

(*Anguilla japonica* T. & S.) 同上(1935, pl. 34, fig. 4). 以上の内ウツボには確かに同種2色があり、普通色の外、赤栗色の地色のものが成幼共に生じるのを知っているが、数は少く、未だ新鮮魚のノートを取つたことがないから附言するに止める。共に A. の縁は白い。

Résumé

The part five of this article contains descriptions of life colors of ten species (nos. 77~86) of the Apodes found in Suruga Bay. The interesting species are as follows: *Ophichthus urolophus*, *O. roseus*, *Gymnothorax leucostigma*, etc. The remaining species of the Apodes, with some exceptions, found in this bay were already mentioned their life colors in several zoological or ichthiological publications in Japan.